

造 型 新



毎日展概評

伊 福 部 隆 彦

毎日展準大賞 外口麗庵氏作品

その書風の上に見られた。西谷元来もついているものは出しているが、卯木は大いに変わりがついているので、これは当然のようだが、事実上は然らな試みとも見える。期待する。

仲田幹一は彼独特のけいしん線が、見馴れてしまつとはじめの時の新鮮味はうすれて来る、これは何を意味するか考へて見たい。然し仮名書家中の一雄傑であることは認めねばならぬ。

期桂琴の作はその文字の布置において特に注目された。松本直の作も今度のものは筆に老いたる滋味の出ているのはよい。

漢字では青山杉雨と金田心象と上条信山、徳野大空、小坂奇石、殿村藍田、木村知石、村上三島、殿村藍田はまことに美しい。青山杉雨はいよいよ作家の作風を示して来た、というのは、彼の人間の我があらわれて来たのだ。

その点で進しいものは金田心象である。この人間の迫力は一ツの力立つといふことは、それ自身天分がなければ出来るものでない。

墨象はいささか低調である。これでは前衛書道の名が泣き出し、それがその時味を書いている。新元大賞・成瀬映山氏作品

初期の大沢雅休、上田桑鳩時代に復帰して再発すべきではないか。それらの中で、兎に角、私の好感のもつ、新しいものを感じたのは、上田桑鳩、中島昌水、武士桑風、比田井南谷、畑紅蓮の五人だけであつた。桑鳩のものは清新な美しさをもち、昌水のものは夢幻的な幽邃性がある。武士桑風は彼の独自の持ち味に美しく沈潜しているが比田井南谷はこれはまたふてふてしく純粋な線のみで何もかもを表現しようとしているその意気は認められるが、これではまたこの造型が芸術品とはなつていないといふことは造型的失敗と言へるかも知れぬ。畑紅蓮の作は要するに書的に造型された詩である、その点において二つの純粋な抽象美をもつていると言えよう。

以上概評であるが、何しろ館内の熱さにあえきながら倉卒の二巡であるので見落した佳品もあつたにちがいない。然し特に所謂大家級の作家については見落してはいない。わざわざ悪口を書くにも値せぬと思われるのであえて黙殺したまでである。

次には熊谷恒平の仮名に、これは文字とおりその出来のすばらし

今年毎日展は、昨年の毎日展しきに驚いた。この展覧会の諸作が何かお祭り騒ぎのような浮ついたものがあつたのに対して、しつじだ。總に高い滋味が出て来て、けさがあり、落つたものがあつて何か実直なものが感じられて好感をもつた。そのうちで、特に好感をもつたのは飯島春故の作で、彼のもつたのは飯島春故の作で、悪口を言つて来たし、事実その嫉妬のあるいやらしさが、およそ私の美的感覚に皮肉として仕方のないものであつた。ところが今度の作には、そのいやらしさがかけを殺して磨り、優しい彼の人間性と今二つ新しい彼独自の技法が運筆の上にあらわされて来た。春故も出鱈目に書いてはいないのだと思われた。ここからすすむなら新しい書の世界をひらく可能性もある。



安藤堀石氏の「書道百年」出版記念会が、九月二十日、東京虎ノ門の晩翠軒で開かれ、西川寧氏ら著名人七十数氏が出席した。

◇ ◇